令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 常盤北 小学校 ）　学校番号　０４１　【様式】

目指す学校像	「子どもが伸び合い、地域に信頼される学校　～一人ひとりの Well－being（幸せ）の実現を目指して～　」 ○人が躍動する学校　　○学び舎として落ち着きと美しさのある学校

重点目標	1　魅力あふれる授業の創造と真の学力の育成 2　自己肯定感・自己有用感を高める、安心・安全できれいな学校づくり 3　コニュニティー・スクールとして、地域とともにある学校づくり 4　教職員一人ひとりに応じた働き方改革と意欲に満ちた教職員集団の醸成

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和６年２月２０日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	（現状） ○全国学力・学習状況調査や市学習状況調査では、国語、算数ともに全国、市平均と比べ概ね良好な結果である。 ○市学習状況調査では、学びに向かう力等に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、学年間で相違はあるが、市平均よりやや高い。 （課題） ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、特に国語の「読むこと（思考・判断・表現）」に課題が見られる。 ○スタディサプリなどのアプリを効果的に活用して、学びの個別最適化、探究化を進める必要がある。	・学びの個別最適化、探求化に向けたタブレット端末の活用	①全国学力・学習状況調査について、児童が自己採点を行い、その結果を情報端末上のシートに入力することで、児童が自らの学習状況を把握できるようにする。 ②デジタル教科書、ドリルパーク、スタディサプリ等のアプリを取り入れた授業を実践する。	①児童が自己採点の結果を基に、自らの学習状況を把握し、目標を立て、達成に向けて行動できるようになったか。 ②学校自己評価（児童評価）において、「楽しく授業に取り組んでいる」の肯定的な回答の割合が９２％以上になったか。	①全国学力・学習状況調査について、児童が自己採点を行い、その結果を情報端末上のシートに入力し、児童が自らの学習状況を把握・分析する取組を行った。 ②学校自己評価（児童評価）において、「楽しく授業に取り組んでいる」の肯定的な回答の割合が９１．４％であった。	B	○タブレットの活用率は、全国学力学習状況調査の結果によると、全国平均と比較して高い傾向があるが、学年間で活用の差がある。個別最適な学びにむけ、タブレット端末の有効な活用事例を教員間で共有できるようにしていく。	・タブレットの活用方法が成熟されてきたことを感じられる。学級間の活用率の差が、児童の話から見られるので、エバンジェリスト制度を有効に活用していくとよい。
		・読解力向上に向けた国語科、社会科の授業改善	①全国及び市の学習状況調査の最新の結果を基に、読解力に関する状況を分析するとともに、指導者を招聘した研修会を実施し、より効果的な手立てを設定し、読解力の向上を図る。 ②文章や図表など幅広い資料を読み解く場面を設定した授業を構成する。	①学校自己評価（職員評価）において、読解力向上に関連する項目の肯定的な回答の割合が９５％以上となったか。 ②読解力に関する問題について、正答率を７５％以上とすることができたか。	①読解力に関する状況を分析するとともに、指導者を招聘した研修会を実施し、より効果的な手立てを設定し、読解力の向上を図った。学校自己評価（職員評価）において、読解力向上に関連する項目の肯定的な回答の割合が９５．７％であった。 ②読解力に関する問題について、正答率は約７０％であった。	A	○全国学力・学習状況調査（国語）の「読むこと（思考・判断・表現）」の課題は改善されてきた。読書をする習慣について、図書室の来館記録や読書記録等から、低い傾向が見られる。生涯にわたり深い学びの下支えになる自主的な読書活動ができるよう、学校図書館の充実を図る。	・読解力向上の研修の成果がよく分かった。読書活動はすべての学習の基礎になると考えられるので、読書活動の充実に努めるとよい。
2	（現状） ○市学習状況調査では、「自分には、よいところがあると思う」の質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均を下回る学年が複数見られる。 ○児童数及び教職員数が少ないことから、清掃が十分に行き届かない場所がある。 （課題） ○児童一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングで組織的に支援・相談していく体制づくりが課題である。 ○清掃の意義を理解し、主体的に考えて行動できるようにすることが課題である。	・児童一人ひとりに寄り添った教育支援・相談に向けた校内体制の充実	①いじめを早期発見・解決するため、情報端末を活用して、定期的な児童アンケートや面談等の記録を蓄積し、児童一人ひとりの状況を継続的に把握・支援できるようにする。 ②道徳の授業公開、読書活動の推進など、児童の自己肯定感等を高める教育活動を実践する。	①学校自己評価（児童評価）において、「先生に励ましてもらっている」の肯定的な回答割合が８０％以上となったか。 ②市学習状況調査等における「自己肯定感」の肯定的な回答割合が市平均を上回ったか。	①学校自己評価（児童評価）において、「先生に励ましてもらっている」の質問に肯定的な回答をした児童の割合が、市平均を下回る学年がまだ複数見られる。子どもたちの自尊感情を高めるために、よさを認め、悩みは共に解決していく教育相談体制の充実を進めていく。 ②道徳の授業公開、読書活動の推進等を実践した。市学習状況調査等における「自己肯定感」の肯定的な回答割合が市平均を下回る学年があった。	B	○「自分には、よいところがあると思う」の質問に肯定的な回答をした児童の割合が、市平均を下回る学年がまだ複数見られる。子どもたちの自尊感情を高めるために、よさを認め、悩みは共に解決していく教育相談体制の充実を進めていく。	・あいさつができる子は、自尊感情が高いように感じられる。子どもの良さを認め、自分のよさを実感させることが、挨拶の定着につながると感じた。
		・安全できれいな学校の実現に向けた清掃活動の充実	①清掃指導体制を見直すとともに、児童が主体的に清掃活動に取り組めるよう支援する。 ②点検表に基づく安全点検を定期及び随時実施し、危険個所の早期発見・修繕を徹底する。	①学校自己評価（保護者評価）において、関連する項目の肯定的な回答の割合が９０％以上となったか。 ②学校自己評価（児童評価）において、関連する項目の肯定的な回答の割合が９０％以上となったか。	①学校自己評価（保護者評価）において、関連する項目の肯定的な回答の割合が９１．５％であった。 ②学校自己評価（児童評価）において、関連する項目の肯定的な回答の割合が９７．５％であった。	A	○清掃時間、模範を示す教員が増え、子どもたちも見習って清掃している。今後、子どもたちに清掃の良さをより実感できるよう、特別活動や道徳等における指導の工夫改善を図る。	・教職員が率先して清掃し、範を示す姿勢を評価する。着実に継続していくことが大切であろう。
3	（現状） ○昨年度、学校運営協議会を立ち上げ、熟議を重ね、目指す児童の姿を「コミュニケーション力を身に付けた児童」と設定した。また、コミュニケーション力の土台となる「あいさつ」に着目した取組を実践することを共有した。 （課題） ○学校運営協議会において熟議した「あいさつ」について、まだ児童・家庭・地域への共通理解が広く浸透していない。家庭や地域と連携した「あいさつ」運動を進めていけるよう、学校運営協議会や児童会等の活動方法を工夫する必要がある。	・目指す児童の姿を地域・家庭と共有するための教育活動の公開	①学校運営協議会を中心に「期待するあいさつ」を、学校・家庭・地域で共有する。 ②学校・学年だより、学校公開を通して、学校の取組を情報発信するとともに、HP 等で学校運営協議会の情報を発信する。	①学校自己評価（保護者評価）において、「保護者や地域に積極的に情報を公開している」の肯定的な回答の割合が９０％以上となったか。 ②月２回以上 HP の更新ができたか。	①学校自己評価（保護者評価）において、「保護者や地域に積極的に情報を公開している」の肯定的な回答の割合が９６．５％であった。 ②毎週ＨＰ上のブログを更新し、児童の様子等を発信した。	A	○学校運営協議会の運営が軌道に乗り、熟議の内容がより具体的かつ建設的なものに深化している。学校運営協議会の内容をより広く周知ができるよう、学校運営協議会への児童の参加、協議会だより等の活用等を進めていく。	・学校運営協議会で熟議した内容を、各立場で実践に移していることが確認できた。今年度単体ではなく、継続していく必要であろう。
		・学校・家庭・地域が連携したあいさつ運動等の実施	①ＳＳＮ協議会及び学校安全ネットワーク会議において、「あいさつの励行」の具体的な取組を協議し、実施する。 ②常盤小学校、常盤中学校との合同学校運営協議会を開催し、義務教育９年間を通した教育について情報共有する。	①熟議で決定した取組が計画どおりに行われたか。 ②学校自己評価（職員評価）において、「家庭や地域であいさつができている」の肯定的な回答の割合が 52%以上となったか。	①熟議で決定した取組を計画どおりに行い、特にあいさつ運動に力を入れた。 ②学校自己評価（職員評価）において、「家庭や地域であいさつができている」の肯定的な回答の割合が６３．２％であった。	B	○６年生があいさつ運動を行い、それを見た他学年がボランティアであいさつ運動をするといった好循環が見えてきている。まずは、身近な人との挨拶が習慣化できるよう、あいさつ運動等を継続していく。	・小中学校が共通理解のもと、児童生徒主体であいさつ運動を実施していることは大変評価できる。今後も継続し定着していくとよい。
4	（現状） ○児童の欠席連絡についてアプリを活用することで、出欠の確認が簡略化できた。 ○会議資料、保護者配布文書等のペーパーレス化により、業務の効率化につながった。 ○ICT 機器の効果的な活用方法を、エバンジェリストを中心に共有することができている。 （課題） ○保護者向けの文書の更新等のお知らせに課題がみられた。 ○「報告・連絡・相談・見届け」体制の強化が必要である。 ○教科により、ICT 機器の活用状況に差がある。	・教職員一人ひとりに応じた働き方改革の実施	①会議資料等のペーパーレス化、情報端末を活用し会議時間の短縮を図り、教員が授業準備に取り組める時間を確保する。 ②月１回以上の定時退勤を促すため、学年・個人で目標設定をする。	①学校自己評価（職員評価）において、働き方改革に関連する項目の肯定的な回答の割合が９６％以上となったか。 ②教職員一人ひとりが目標を設定し、実行することができたか。	①学校自己評価（職員評価）において、働き方改革に関連する項目の肯定的な回答の割合が９５．０％であった。 ②教職員一人ひとりが目標を設定し、定時退勤を実行するよう努めていた。	B	○働き方改革により、少しずつ時間が生まれてきている。改革を進め、教材研究や教員の自己研鑽、保護者との教育相談等、子どもたちの教育に還元できる時間ができるようにする。	・働き方改革を通して、教員の自己研鑽の時間の確保や、プライベートの充実などにつながる。結果、指導力向上に資するものと考える。今後も教員にとって働き甲斐のある職場づくりに努めてもらいたい。
		・意欲に満ちた教職員集団を醸成する学校の課題に対応した研修の実施	①「報告・連絡・相談・見届け」体制の強化。教職員等から速やかに管理職に報告し、学年主任等を中心に初動から組織で対応する体制を構築する。 ②ICT 活用能力の向上を図るため、エバンジェリストを中心とする提案型研修を積み重ねる。	①学校自己評価（保護者評価）において、「児童理解」に関連する項目の肯定的な回答の割合が８１％以上になったか。 ②教員が自らの授業における課題を把握し、目標を立て、達成に向けて行動できるようになったか。	①学校自己評価（保護者評価）において、「児童理解」に関連する項目の肯定的な回答の割合が８２．１％であった。 ②教員が自らの授業における課題を把握し、研修目標を立て、自己評価を行った。	B	○担任と保護者との連携をより深めるため、教員自身のコミュニケーション力等を高められるような校内研修を充実する。学校課題研究についてはより自分事として教員が取り組めるよう、校内の研究体制の見直しを図る。	・担任と保護者のコミュニケーションが密に取れるよう、懇談会の実施回数や、日頃の連携方法の確認等を、校内研修を充実していくとよい。